
嘘っぱち西遊記

モジカキヤ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

嘘っぱち西遊記

【Nコード】

N8381V

【作者名】

モジカキヤ

【あらすじ】

「吾輩は馬である」という所から始まる、西遊記を原作にした、と言つのもおこがましいくらい、史上類を見ない最低の西遊記、ここに開幕。

1 (前書き)

習作的意味合いもありますので、忌憚なきご意見をいただけたら幸いです。

ピックアップにも別の作者名で同じものを投稿しております。

序

吾輩は馬である。名を玉龍たまりゅうという。

馬であるのに龍とは如何なる事であるか。それについては語るに長くなるが、後ほど語る事にしようと思う。

何？ 興味がない？ そういふ輩は早々に退場するがよからう。この物語を読もうが読むまいが、人生において少しばかりの得にもならない。むしろ損になるだけである。

この話を読んで、気分が悪くなった、好きなあの子を素直な目で見られなくなった、新たな性癖に目覚めた、あの日のほろ苦い思い出がよみがえった、宝くじが当たった 等の被害があつたとしても、それは自己責任でお願いしたい。当方、馬である為、人の世の責を負う事は叶わぬ。

この話は大体において彼らの話と言ってよい。

無論、私が颯爽と物語の根幹へと登場し、八面六臂はちめんろくつひの大活躍、花も恥じらう乙女たちから尊敬と愛情の眼差しを受けるといふ場面も無くは無い。

しかし、あくまで私は馬であり、同時に語り部である。馬の身でありながら、一つの物語を主観的立ち位置より語る事をお許し願う。

大まかに言ってしまうえば、これは麗しき少数の乙女たちと、それを取り巻く無数の変態たちとからなる物語である。

私としても、むさくるしい変態どもの活躍など語りたくは無いが、ごみ溜めに咲く一輪の花がより美しく見えるように、汚らしい連中がある事によって、乙女たちの麗しさがより際立つものと考えていただきたい。

語る事は少なくは無いが、読者諸賢には是非、最後までお付き合
いいただきたく願う所存である。

> i 2 9 2 6 7 — 1 1 2 9 <

人はおろか、妖怪すらも近づきたがらぬ荒野のど真ん中に二つの
人影があった。

一つは馬に跨っており、もう一つは歩いている。賢明なる読者諸
賢は、そこに格差社会の縮図が見て取れる筈である。

「悟空さん、次の町まではどれくらいありますか？」

今言葉を口にしたのは玄装リキョウゾウちゃんという。馬に跨っているのがそ
うだ。黒い長髪に、僧服を模したおかしな服を着ている。

まだまだあどけなさは抜けていないが、非常に整った容姿をして
いる。つまり可愛い。俺色に染めたい。ただしバストサイズだけは
ちよっと成長途中なのか、残念さが付きまとう。だがむしろそこが
良い。むしろ私が揉みしだいて成長させてあげたい。

しかし私は文字通り四つ足であるし、その足の先は蹄鉄ていてつなので、
揉みしだく事が物理的に不可能なのが問題であった。残念無念の極
みである。

ちなみに読者諸賢はお気づきであろうが、彼女が跨っている馬こ
そが私、玉龍である。

「あと半日はかりだろう。もう少しの辛抱だ」

と答えたのが、金の輪を頭につけた妖怪、孫悟空そんごくうである。

彼は若い頃は自ら「齊天大聖せいてんたいせい」と名乗り、あちこちで力に任せて悪さの限りを尽くしたらしいが、ある日とうとう年貢の納め時となり、罰として五百年の間、山を担いで座らされていたらしい。

その間にやる事もなかった為、鉄の球で腹を満たし、銅汁で喉を潤す傍ら、あれこれ思索に耽った拳句、すっかり精神的にも成熟し、今では「齊天大聖」と呟くだけで、彼は耳を押さえて身悶えする有様である。誰にでも知られたくない過去はあるものだ。

「そうですかー、ミケちゃん、もう少し頑張ってくださいね」

玄装ちゃんはそう言って、私の頭をぽぽふと撫でた。私は喜びの嘶いなききを以ってそれに応えた。

私の名が玉龍であるというのは冒頭に述べたが、玄装ちゃんや悟空からは「ミケ」と称されている。名付け親は玄装ちゃんである。

ただの馬が突如として、「どうもこんにちは。玉龍です！」などと名乗れる筈もない。というかそもそも喋れない。

まるで猫さながらの名前を付けられてしまった私であるが、名付けてくれたのが玄装ちゃんであるから、文句がある筈もない。世界は大体玄装ちゃんを中心に周っているのだ。

それにしても荒野の日差しは暑い。非常に暑い。何処にも日影が無い。

私は玄装ちゃんを乗せたまま、頑固一徹の職人のごとく黙って歩いていた。

出来る事なら、玄装ちゃんのぷりぷりしたお尻の感触を直接背中に味わいたいのだが、鞍という邪魔ものが間に鎮座している為、私が背中に感じる感触はごっこつとしたものだ。

私は苦々しく思ったが、鞍がなければ玄装ちゃんの可愛らしい内

股が擦れて、真っ赤になっってしまう。しかし、それはそれで非常に良い。実に良い。

むしろ内股だけではなく、ちょっと敏感な所まで擦れてしまい、「んっ……」と羞恥に頬を染める玄装ちゃんも見たい。すごく見たい。想像しただけで私の腰の妖刀は絶好調である。想像力とは何物にも代えがたい才能であると知れ。

私が健全なる男のリビドーを内に進らせているにも拘らず、当の玄装ちゃんは暢気のんきなものだった。日傘を差して、「暑いですねえ」などのたまっている。

そんなに暑ければ服など脱いでしまえばいいのだ。私は馬であるから年中自らを解放し続けている。この解放感は一度覚えると病みつきになる。玄装ちゃんにもこの素晴らしさを伝えてあげたい。そして共有したい。それが、私がこの世に生まれた意味ですらある、と言っても過言ではない。いや、過言だった。言いすぎた。

「おや、あんな所にオアシスがあるな。一休みしていこうか」

悟空がそう言うので前を見てみたがなにも見えぬ。

それもその筈で、彼の目は常人の数倍の視力を持ち、我々が見えぬくらい遠くの物ですら、易々と見通す事が出来るのである。

実に羨ましく、またけしからん能力であると私は思う。それ程の視力が有るならば、見つかるかも知れぬというリスクも無しに、女性の神秘についての哲学的考察を兼ねた諸々の観察に役立てる事が出来るだろうに。

私は齒噛みした。

我々は歩みを進め、約二十分後にオアシスへと辿りついた。

荒野の真ん中にも拘らず、泉が滾々と湧きだしており、周囲には青々とした草が茂っていた。馬にとって草は好物。玄奘ちゃんを降ろした私は悠々と草を食む事にした。

うむ、旨い。

馬になって良かったと思う事は、道端の草が有ればひとまず食うには困らぬと言う事である。

玄奘ちゃんは靴を脱ぎ、泉に足をつけて「ふへえ」と顔を緩めている。どうせなら服を脱ぎ捨て水浴びしても良いくらいなのにもつたいない。どうせここに居るのは妖怪猿と馬だけである。何の遠慮があるものか。

悟空は金輪を外して顔を洗っていた。私も草を食みつつ、冷たい泉の水を喉に流し込んだ。

日差しは相変わらずきつい、水はひんやりと冷たい。地獄の様な日差しの中で、束の間の安息を我々は楽しんでいた。

すると突然、悟空がピクツと顔を上げ、自慢の得物である如意金箍棒にょいぎんこぼうを構えた。

彼が警戒するのは明らかなる危険のサインであるが、周囲を見回しても何ら変わった所は見受けられぬ。私と玄奘ちゃんは首を傾げた。

刹那、泉の水が盛り上がり、中から毒々しい色をした大蛇が我々に飛びかかってきた。肝が冷えた。

悟空は如意棒を振りかざし、大蛇へと飛びかかる。私は咄嗟に玄奘ちゃんの襟首を啜えて泉から引つ張り上げ、戦いに巻き込まれない位置まで下がった。我ながら惚れ惚れするような仕事ぶりである。

「蛇さんですか？」

私の引つ張られながら、玄装ちゃんは目をまん丸にしているが、怖がっているという様子では無い。胆力があるのか、単純におバカさんであるだけなのか分からぬ。そこがまた可愛い。異論は許さぬ、あれば却下だ。

悟空は如意棒で大蛇の尻尾と何合か撃ち合った後、大蛇の尻尾を弾き飛ばし、そのままさらに身を翻して、如意棒で大蛇の頭に一撃を入れた。

大蛇は粉碎され、その巨体は派手な水しぶきを立てて泉の中に沈んだ。どす黒い血が泉一面に広がり、清涼なる泉はあつという間に血みどろの惨状へと早変わりした。

私はすこぶる気分が悪くなった。もつとスマートに戦ってもいいものだと思っただが、私にはスマートな戦いは思いつかなかった。遺憾である。

悟空は如意金箍棒を肩に乗せ、泉をまじまじと見つめて呟いた。

「おそろく毒蛇だろうな、……もう水は飲まん方が良いだろう」

「悟空さん、これでは泉が使えないではありませんか」

「……玄装殿は泉と命とどっちが大事なんだ」

ぶんすか怒る玄装ちゃんを、呆れ顔で諭す悟空。私はいつでも玄装ちゃんの味方である。「ぶるるる」と嘶き、悟空を睨みつけたら、睨み返された上に如意棒でこつんとやられた。馬を大事にしないと罰が当たる。断言できる。月の無い夜には用心すべし。

「とにかく、これはこのまま放つては置けないな」

悟空はそう言うと、周囲にあった大岩を持ちあげ、泉に放り込ん

で埋めた。

確かに毒の泉をそのまま放置しておくのは得策ではない。この荒野を旅してきた者の喜びが、一瞬にして絶望へと変わってしまうからである。おそらく、過去に泉に引き寄せられ、大蛇の餌食になった旅人が随分いた事は想像するに難くない。

我々は名も知れぬ過去の旅人たちを弔い、泉だった所を後にした。

「水筒に水を補給しておけばよかった」と、悟空は残念そうに言った。確かにそうである。私ももつと飲んでおけばよかったと後悔した。しかし後の祭りである。玄奘ちゃんだけはあっけらかんと、「直ぐに街に着くのでしょうか？ それならば気にする事など無いではありませんか」等とのたまった。それがゆえに悟空に、「その樂觀視しすぎる癖をなんとかしろ」と怒られていた。

おのれ悟空、玄奘ちゃんに説教するなど生意気である。私だって説教したい。あえて玄奘ちゃんをしょんぼりさせて涙目にして、征服欲を満たしたい。しかし先にも記述した様に、人語を発音する事が出来ぬ。口にした言葉は嘶きへと変貌するのみだ。甚だ遺憾である。

兎にも角にも、我々一行は日が暮れる前に町に到着する事ができた。

「やれやれ、なんとか辿りついたな。宿を探さねばなるまい」

悟空は町の入り口で守衛の兵士と話をし、手頃な宿を紹介しても

らっていた。守衛は人間であつたが、妖怪猿である悟空を恐れている様子は無かつた。

この世界では妖怪は珍しい存在ではない。もちろん、人に害を成す妖怪はごまんといえるが、人間に友好的な妖怪も同じくらい居るのである。私や悟空が良い例である。

町によつて、妖怪に対して友好的であつたり、排他的であつたりという事があるが、この街は幸いにして前者であつた様である。我々はホツとし、紹介してもらつた宿に向かつた。

宿は我々が街に入つた場所から、ほぼ反対側の端に位置していた。決して高級という風ではないが、綺麗に掃除が行き届いており、仕事の丁寧さを伺わせた。

どうやら旅の商人の一隊が団体で宿泊しているらしく、宿はかなり騒がしかつた。商人たちの馬にガンを付けられたので、私も睨み返した。

私は馬なので、宿の中で眠る事にはならぬ。馬の生活には慣れたものだが、せめて一度は玄奘ちゃんや悟空ちゃんの寝床に潜り込みたい。そしてそのぷりぷりした身体を蹂躪したい。しかし私は紳士であるので、その様な蛮行に及ぶ事は無く、あくまで想像の内におのみ留めておくのである。そもそも四足であるから夜這いが物理的に不可能であるのだが。

さて、私は宿の外にて木に繋がれていた。尤も繋がずとも逃げはしないのだが、玄奘ちゃんや悟空にとつて、私は唯の馬なので、彼らはその様にしか扱わぬ。まあ馬だから当然と言えば当然なのだが、いささか人肌が恋しい。

出来る事なら玄奘ちゃんに抱きつきたい。抱きついてすべすべの肌を堪能して眠りに就きたい。

しかしながら、私が抱きつくくと彼女は馬の巨体に押しつぶされ、あつという間にぺしゃんこになつてしまつたらうからそれも出来ぬ。

彼女が抱きついてくれるのが一番良いのだが、人間が馬小屋で眠る事はあまりしないからこれも現実的ではない。

しかしかのじいざす・くらいすと様でさえも馬小屋で生まれたのである。万民、馬小屋で眠るべし、と私は声高に主張したい。しかし口からは馬の嘶きしか出てこなかった。

結局私はいつもの通り、頭の中だけの恋人（妄想的玄装ちゃん）と夢の中で抱き合って眠りに就く事になるであろう。慣れたものだが、少し切なかった。

かくして私は夕飯として出された馬草まぐさを噛みしめ、水を飲んだ。食事を続けていると、悟空が外に出てきた。

「ミケ、今日もご苦労だったな」

とねぎらいの言葉をかけてくれる。此奴は意外に良い奴だ。馬市場で売られていた私に目を留め、玄装ちゃんの馬として買ってくれたのも悟空だ。いけ好かない所もあるが、やはり悟空には感謝しなくてはなるまい。私は応える等に「ぶるる」と嘶いた。

悟空は私の横に腰を降ろして、麦酒ビールを飲んでいて。私も龍の時はよく飲んだものだが、馬になってからはほとんど御無沙汰である。

宿の中は商人たちが酒盛りをしているらしく、煌々と明かりが灯り、賑やかな声がここまで届いていた。

「どうやら私は無意識に悟空の方を見ていたらしく、悟空は「飲むか？」と麦酒の缶を私の方に差し出した。といっても私は足しかないので受け取れないのであるが。」

「ま、飲むわけ無いか。お前は馬だものな」

「いやいや飲みたいんだよ、この馬鹿。」

私の訴えも聞き届けられず、悟空はごくごくと麦酒を飲みほして

しまった。おのれ悟空、やはりいけ好かん奴だ。
私は自棄やけになつてがぶがぶと水を飲んだ。水はぬるくなつていた。
ちくしょう。

しばらくすると、「悟空さーん、悟空さーん」と玄装ちゃんの声
が聞こえてきた。声も可愛い。正直堪りません。

「こつちだよ」と悟空が呼ぶと、扉が開いて、玄装ちゃんがぼてぼ
て歩いてきた。

「ここにいたんですか、悟空さん。早く寝ましょうよ」

「玄装殿……、いい加減に一人で寝られるようになりなさいよ」

なんだと。まさか悟空の奴、玄装ちゃんと添い寝をしているとい
うのか。

信じられない言葉に、私は絶句した。馬だから言葉など元より無
いのであるが。

「だって、昨晚も怖い夢を見たのですもの。私が眠るまでで良いで
すから……、ね？」

上目づかいで悟空に言う玄装ちゃん。

おのれ悟空。これまでの人生（馬生、あるいは龍生）においてこ
こまで他人に殺意を覚えた事は無かつた！ 人の恋路を邪魔する奴
は馬に蹴られて死んでしまえ！

私は雄々しく嘶き、前足で悟空を粉碎しようとしてみた。

しかし、私の蹄鉄が悟空の頭に当たっても、悟空は平然としてい
た。むしろそんな事には気づいていないという様な風体である。逆
に私の足が痛くなった。おのれ悟空、この恨み晴らさでおくべきか！

「どうしたんですか、ミケちゃん？」

気付くと、玄装ちゃんが私の顔を覗き込んでいた。怒りで我を忘れていたが為に、玄装ちゃんの接近に気付いていなかった。驚いた。

「虫の居所が悪いですか？ 良い子良い子」

玄装ちゃんは屈託のない笑顔で私の鬢たてがみを撫でる。彼女の白魚のごときすべすべの指先により、先程までの私の怒りは雲散霧消した。

悟空は先程私の足が直撃した所に違和感があるのか、ぽりぽりと頭を搔いていた。

玄装ちゃんと悟空は宿の中に入って行ってしまった。

私は玄装ちゃんの指の感触を思い出し悦に浸っていたが、ハタと悟空の奴が玄装ちゃんと添い寝するであろう事実を思い出し慌てた。しかし私は木に繋がれているので、行動範囲はあまりに狭い。おのれ悟空、と私は地団太を踏んだ。

私が悔しがっていると、塀の向こうで誰かがひそひそと話をしているのが聞こえた。

これは自慢だが、私は結構な地獄耳である。獣の五感を馬鹿にしてはならぬ。

別段興味もなかったが、耳に入ってきてしまうので、私は無意識的にそちらに耳をそばだてた。

「……よし、みんな寝ているようだな。準備はいいかお前ら」

「もちろんだよ、紅兄貴！」

「俺たちに任せてよ！」
「やかましいのう……」

声は四つである。青年の様な声の一つ、まったく瓜二つの少年の様な声が二つ、少女の様な声一つ。なにやら妖気の様なものを感じるので、おそらくは妖怪であろう。このような夜更けに外を歩くような輩に碌なものはいない。それは人間でも妖怪でも同じである。

少年の様な声が、また喋った。

「でも紅兄貴、どうして今日が良いの？」

「バカ、そりゃ今日は旅人が沢山来ているからだ」

青年が答え、それに少女が重ねた。

「それに商人が殆どじゃ。金目のものは多いに決まっておる」
「なるほどー！」

何やら物騒な話である。此奴らは妖怪の盗賊団であるらしい。たったの四人で大勢が泊っている宿を襲うなど、普通は無謀であるが、妖怪ともなれば話は別である。どうやら厄介な事になってきたようだ。

私は「ヒヒーン！」と大きく嘶き、危険を伝えようと試みた。

「こ、紅兄貴、馬が鳴いたよ！ みんな起きちやうよ！」

「バカ、お前昼間の内に商人たちに眠り薬入りの酒を売ったのを忘れたか」

「あつ、そうだった。流石紅兄貴、抜かりないね！」

「あつたり前田のクラッカーよ！ よし、きんかく金角、ぎんかく銀角、たまお玉、行くぞ！」

明かりは灯っているのに、宿の中が妙に静かだと思ったら、そういう事であったか。さては悟空の飲んでいた缶麦酒にも薬が入っていたな。

盗賊団は塀を乗り越え、宿の庭に降り立った。リーダー格らしき青年は、燃えるような赤い髪をしている。彼が「紅兄貴」であろう。そのわきに、瓜二つの容姿をした十二、三程度の少年が二人立っている。片方は金色の髪の手をしており、片方は銀色だ。おそらくは双子であろうと私は見当をつけた。おそらくは金色が金角、銀色が銀角であろう。逆ではややこしい。

そしてもう一人、和服に袴という出で立ちで、金色に近い茶色の髪の毛をした美少女がいた。彼女は「お玉」と呼ばれていたろうか。年齢的には玄装ちゃんと同じくらいであろう。人の耳では無く、狐の耳が頭の上でぴこぴこ動いている。かなり可愛い。俺色に染めたい。

四人は辺りを見回し、危険が無い事を確かめていた。双子の金色の方が私を見つけた。

「紅兄貴、馬がいるよ」

「馬？ おお、中々良い馬だな。荷物を積んで運ぶ馬はこいつにするか！」

「冗談ではない。何が悲しゅうて玄装ちゃんのお尻では無く、重苦しいだけの財宝やら男の汚らしい尻やらを乗せねばならんのか。…まあ狐耳の美少女は考えてやっても良い。」

「銀角、馬に手綱を付けていつでも行ける様にしておけ」
「任せてよ、紅兄貴。……どうどう、大人しくしろよ」

と、双子の銀色　やはり此奴が銀角であったようである　の方が近づいてきたが、黙って盗まれる私ではない。私は銀角の襟首を啜え、ひよいと持ち上げた。

「きゃっ、兄貴助けて」

銀角が叫びを上げる間もなく、私は彼を塀の向こうへと放り投げた。

銀角は悲鳴を上げながら塀の向こうへと飛んで行った。どさりと地面に落ちる音と、「痛い！」という泣き声が聞こえた。

残った三人は目を白黒させて後ろへと下がった。

「此奴……、随分気性の荒い馬だのう……」と狐耳少女が呟いた。

「銀角、大丈夫かー！」

金角が叫んだ。塀の向こうから銀角が、「お尻を打ったよー、痛いよー」と涙声で喚いている。リーダー格の赤毛が苦々しげに舌を打った。

「えい、面倒だ。馬は後回し！　金目の物を集めるのが先だ！」

「おいおい、物騒な事言っくなよ……」

その場にいる人物の誰でもない声に、私はもちろん、盗賊たちも驚いた。声のした方に目を向けると、宿の壁に悟空がもたれかかって面倒臭そうにこちらを見ていた。

「ご、悟空おじさん……」

「紅孩児こうがいじ、久しぶりに会ったと思ったなら何してんだお前」

リーダー格の赤毛は紅孩児というようである。

此奴と悟空が知己であったどころか、叔父と甥の関係であるとは
どういふ事であるうか。世の中は不思議な事で溢れているものだ。

双子の片割れの金角が思い出したように叫んだ。

「あつ、昼間に麦酒買ってくれたお猿さんだ！」

「おう、麦酒旨かったぞ」

「眠り薬入れてたのに！　なんでなんで？」

金角がわたわたと慌てる、悟空は「あの程度が俺に効くもんかい」と涼しげに言い放った。

この化け物猿はかつて天界を相手取って大暴れしたとだけあって、並大抵のことでは傷つかぬ。私の怒りの蹄鉄キックも通用しない。味方になると頼もしいが、此奴が本当に敵だったらと思うとゾツとする。

「おい紅孩児、今なら無罪放免で見逃してやる。さっさと帰れ。それで牛魔王によろしく言つといてくれ」

悟空がそう言つと、紅孩児は髪の毛と同じくらい顔を真っ赤にして憤慨した。

「バカ言つな！　俺だってもう一人前の男だ！　こんな所で逃げ帰れるか！　おじさ……、いや、孫悟空！　こうなつたらお前を倒してくれ！」

紅孩児はそう言つや否や両腕に炎を宿し、悟空に飛びかかった。

悟空は慌てる事無く如意金箍棒を取り出して応戦する。紅孩児は文字通りの火花を飛び散らかせ、こぶし大の火球をいくつも悟空に放つたがすべて弾かれている。

「兄貴、手助けするよ！」

と金角が大刀だいたうを振りかざして悟空に躍りかかった。しかし悟空はまるで臆することも無く、涼しい顔をして淡々と紅孩児と金角の攻撃を受け流している。

「あつ、大変だ！ 兄貴たち、俺も手伝うよ！」

いつの間にか塀の向こうから復帰していた銀角も、大刀を振り上げて攻撃に加わった。

三位一体、とまでは行かずとも、共に行動しているだけあって、愉快な盗賊たちは中々の連携で悟空に打ちかかっていた。

しかし、悟空は顔色一つ変えず、三人の攻撃を易々と受け流すだけでなく、欠伸あくびまでしていて、完全に遊んでいるといった様子である。

「ほら、どうした。そんなもんか」

「舐めんな、チクシヨー！」

三人の攻撃は勢いを増したが、悟空を仕留めるどころか状況は何も変わっていないように思われる。

男どもの戦いはともかくとして、狐耳のお玉ちゃんはどうしたのであろうか。

私わたしがきよるきよると見回してみると、彼女は戦いの場から一歩引いた所にいた。

「……えっと、どうしよう」

どうやら加勢に入るタイミングを逃したらしく、オロオロと何処

へ行くでもなくそのあたりを歩き周っている。可愛い。

私が彼女を眺めていると、不意に弾き飛ばされた大刀が私に向かって飛んできた。

間一髪！ 私は身をかわした。代わりに私を木に繋ぎ止めていた縄が切れた。これは僥倖じやうじやくとばかりに、私は疾走し、お玉ちゃんの襟首を啜え持ち上げた。

「ひゃあ？ 何をする！？」

お玉ちゃんはきゃあきゃあ喚ぐが、知った事ではない。私はお仕置きだとばかりに彼女をぶんぶん振りまわした。

「うああー、目が回るう！」

振りまわしているうちに、着物の方が耐えられなくなったのか、すぽんと脱げた。

私は着物だけを口に啜えて啞然とした。目の前には上半身裸になったお玉ちゃんが目を回してひっくり返っていた。控えめながら存在を主張する二つの柔らかな饅頭まんじゅうが呼吸に合わせて上下している。正直堪りません。

二つの白い饅頭の急襲により、理性と言う名のタガを完膚なきまでに粉碎された私は、鼻息も荒く彼女に向かって躍りかかろうとした。しかし、紅孩児より発されたのであるう流れ火球が私の頭をかすめ、鬘たてがみに火が着いた。もっとしっかり狙って打ってもらいたいものである。

私は悲鳴を上げ、水を求めて奔走ほんそうした。

ようやくと火を消し、庭に戻った時には、なにやらのつぴきならぬ状況に陥っていた。

いつの間にか起きだしてきたのであろう玄装ちゃんが人質に取られ、悟空は苦虫を噛み潰したような顔で、盗賊団を睨みつけていた。

「ふふふ、形勢逆転だな、孫悟空！ 格下だと思って油断したのが運の尽きだ！」

「尽きだ！」

悟空と対照的に、紅孩児と愉快な仲間たちは勝ち誇った表情である。お玉ちゃんもいつの間にもやらきちんと着物を着直していた。ちくしょう。

しかし人質に取られた当の玄装ちゃんは、首元に大刀を突き付けられているにも関わらず、暢気な表情である。

「まあまあ皆さん、落ち着いてお茶でも飲みませんか？」

あつけらかんと言いつつ玄装ちゃんに、思わず目を丸くする面々。銀角が得意げにふんぞり返った。

「お譲ちゃん！ 泣く子も笑う紅孩児盗賊団とは俺達の事だよ？」

「銀角、泣く子も笑うじゃない、泣く子も黙るだ」

「あつ、そうか。流石は兄貴だ」

どうやら此奴らはあまりおつむの方はよろしくない様である。泣く子に笑われるのも仕方がないと言えよう。

おつむが残念であっても、この状況はあまりよろしくない。何がよろしくないかと言えば、愉快的盗賊たちの身が危ない。

「あつ、見てよ紅兄貴、この子すごく高そうな物持つてるよ？」
「何っ？」

金角が言つすごく高そうな物というのは、玄奘ちゃんの持つ『愛の錫杖』の事であろう。この錫杖、なんでも玄奘ちゃんの家に代々伝わる家宝だそうで、彼女の一族が信仰し続けている、「ラヴァーズ様」なる謎の神様から授かったらしい。

長さは六尺ほどで、先の方に三日月を寝かせた様な飾りと、その上に丸く平たい飾りとが付いている。これらはそれぞれ月と太陽とを現しており、これらが一緒にある事で調和の象徴としているそうだ。

先の飾りは金で出来ており、値段が幾ばくかになるかは分からないが、かなりの業物である事は窺い知れる。

紅孩児が錫杖に手を伸ばさんとした。すると悟空がギョツとした表情で叫んだ。

「やめる！ それに触るな！」

「ほほう、おじさ……、貴様がそう言う程とは、かなり高価な物に違いあるまい！」

悟空の制止も当然突っぱね、紅孩児は錫杖を握った。

瞬間、錫杖から眩いばかりの光と衝撃波が発され、愉快的盗賊たちは吹き飛ばされた。

この光は玄奘ちゃんには効果が無いようで、彼女はけるりとしている。悟空は手で顔を覆い、私は目を白黒させた。眩しかったのだ。光が収まり、玄奘ちゃんの横には巨大な人影が立っていた。

「出たーっ！」悟空が叫んだ。

異様な人影であった。

まず背の丈が八尺は悠に超えている。身体は筋骨隆々としており、健康的に日焼けした肌に、ビキニパンツが一丁。そして風にはためく真っ赤なスカーフ。頭部の形が最も特徴的で、ハートマークを模した形をしている。そして白い歯をきらめかせてニヒルな笑みを浮かべているのだ。

見ているだけでげんなりするこのお方が『ラヴァーズ様』と思われた読者諸賢も多いかと思われるが、この方はラヴァーズ様本人ではなく、ラヴァーズ様の使いの『渚のジヨニーさん』である。

彼はラヴァーズ様から命じられ、玄装ちゃんが危機に陥った際、自らの自宅である『愛の錫杖』から飛び出して、妖怪山賊魑魅魍魎よっかいさんぞくちみせうりょうの有象無象はもちろん、果ては薄っぺらいプライドまでも自慢の鉄拳を以って粉々に粉碎する。

ジヨニーさんは、啞然としている紅孩児に飛びかかり、鉄拳一閃、彼を空中へと弾き飛ばした。

「あ、兄貴ーっ！」

金角と銀角が叫ぶ、ジヨニーさんは双子にも鉄拳を放った。「きやあー！」と叫んで、二つの影が夜空に舞い、続いて狐耳のお玉ちゃんが空を飛んだ。

ジヨニーさんは女性には紳士なので、鉄拳を振るうなどという事はせず、両手でひょいと持ち上げて放り投げた。世の男性諸君は見習わねばなるまい。

「あらまあ……、お気をつけてー」

夜空を飛んでいく愉快的盗賊団たちに手を振る玄装ちゃん。

ジヨニーさんは一仕事やり遂げた、という表情で「愛の錫杖」の中へと帰って行った。悟空は見たくもない物を見たという具合に、

額に手を当てて頭を振っている。

騒がしい一夜はなんだかよく分からないうちに更けて行くのであった。

1 (後書き)

読んでいただきありがとうございます。感想などいただけると嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8381v/>

嘘っぱち西遊記

2011年10月8日11時48分発行